

湾岸アラブ諸国における詩文化の興隆と 国民アイデンティティの形成

竹田敏之

I. はじめに

サウディアラビアやアラブ首長国連邦 (UAE)、クウェートをはじめとする湾岸アラブ諸国は、周知のように潤沢なオイルマネーによって飛躍的な経済発展を遂げてきた地域である。そして、この地域は目下、急速な社会変化による言語・文化の変容を経験している最中にあり、現代アラビア語研究にとってきわめて重要なフィールドとなっている。しかし、湾岸アラブ諸国を対象とした言語社会的な研究は、エジプトやシリア・レバノン、マグリブ地域を対象とした先行研究の蓄積と比較すると圧倒的に少なく、現代アラビア語の展開を論じる上で、いまだ未解決の事項が山積している。本稿は、こうした研究上の空白を埋めるために、湾岸地域における言語規範の特徴と国民アイデンティティの形成について、方言詩と文化伝統の保護・普及を鍵言葉に探ろうと試みるものである。さらに同地域において、「ワタン（祖国／故郷）」なるものが、国家の発展と文化的要素とのかかわりの中で、どのような諸相を見せながら存在しているのか、考えてみたい。

II. 湾岸アラブ諸国の勃興と「ハリージー」意識の確立

まず、湾岸アラブ諸国を対象とする場合、その国々が位置する「アラビア半島」(shibh al-jazīra) と「湾岸諸国／地域」(duwal al-khalij / minṭaqat al-khalij) という用語を整理する必要がある。アラビア半島は、「(ラクダとともに) 止まれ、一緒に泣こう」¹で始まるイムルウルカイス (540 年没) による有名な詩の冒頭が象徴するように、ジャーヒリーヤ時代 (前イスラーム時代) の詩人の世界が描き出す「沙漠」、そして原風景としてのアラブ・イスラーム生誕の地であり、その文脈での「アラブ性」と密接な関わりを持っている。ハディースを典拠とする (伝承経路を「脆弱」と判断するハディース学者もい

¹ 原文: فَقَاتِلْكَ مِنْ ذِكْرِي حَبِيبٍ وَمَنْزِلٍ مِنْ سِفْطِ الْوَيْ نَيْنَ الْخَوْلِ فَخَوْلِ

る) 次の言葉「アラブを敬愛しなさい。私(預言者ムハンマド)はアラブ人であり、クルアーンはアラビア語であり、天国の民の言葉はアラビア語である」²にあるように、全世界のイスラーム教徒にとってムハンマドの故郷のアラビア半島、そして、そのアラビア語は憧憬的とも言える。

このアラビア半島の文化社会は端的に言えば、遊牧性と部族的紐帯の上に成り立っている。言葉も同様である。アラブの言語学者(『アインの書』の著者で韻律学の祖として知られるハリール〔789/91 没〕やクーファ学派を代表する文法家キサーイー〔804 没〕など)は、タミームやアサド、タイイ、キナーナといった半島内陸部の特定の部族に基づく方言にアラビア語の純粋性／正則性(ファサーハ)を見出してきた³。それは、こうしたアラブ諸部族は地理的・地政学的にも非アラブ人(非アラビア語話者)との接触の機会がなく、外部文化や異文化要素の伝播による変化を受けなかったという理由に基づく。この原風景的な意味でのアラブ・セントリックな言語意識は、実はその内部であれば方言の多様性を許容する傾向を持ち合わせている。この種の正則性への規範意識は古典期のみならずアラビア半島の人々が現代でも強く有するものである。

それとは対照的に、19 世紀以降の歴史的シリア地域、エジプトを中心に議論され、その後、アラブ諸国の独立、アラブ・ナショナリズムを経て成立し共有されるようになった共通語としての現代アラビア語は、口語／方言的要素や例外用法を極力排除する傾向が強く、アラブ諸国全域で共有される均一性を志向するという点など、規範意識の面でも先のアラビア半島の例とはだいぶ趣を異にしている。ここにアラビア半島原風景としての「アラブ」のアラビア語と、文化的なナショナリズムに基づく 22 カ国の「アラブ」(いわゆる現代アラブ世界)の標準語としてのアラビア語という似て非なる 2 つの言語観が見えてくる。

一方、湾岸諸国／地域という用語は、石油資源を背景としつつ、1981 年の湾岸協力会議(正式名称:「湾岸アラブ諸国協力会議」〔The Cooperation Council for the Arab States of the Gulf〕)の結成によって新しく成立した地域を一般には意味する。通称 GCC〔Gulf Cooperation Council〕の名で知られるこの地域機構は、ペルシア／アラビア湾沿岸に位置するアラブ諸国のクウェート、サウディアラビア、バハレーン、カタール、アラブ

² 原文: أَجِبُوا الْعَرَبَ لثَلَاثٍ، لِأَنِّي عَرَبِيٌّ، وَلِالْقُرْآنِ عَرَبِيٌّ، وَكَلَامِ أَهْلِ الْجَنَّةِ عَرَبِيٌّ

³ データ収集の対象となったのは、外部と接触の少ないアラビア半島内陸部のアラブ諸部族で、おもに 6 部族(タミーム、カイス、アサド、フザイル、タイイ、キナーナ)に限られていたと言われている [竹田 2014: 282]。

首長国連邦、オマーンの6カ国を加盟メンバーとしている。このGCCの成立によって、古来より部族意識や系譜・血統を重んじてきたアラビア半島のアラブ人は、遊牧生活や鷹狩、真珠採取やダウ船、アラブコーヒーなどの伝統文化を共有しながら、また各国の国籍を持ちつつも、「湾岸」を意味する「ハリージュ」からできた形容詞で「ハリージー」（湾岸人）と呼ばれる新たな帰属意識を形成してきた。

ハリージーと言った場合、アラブの原風景として最重要地域の一つであったイエメンはGCC諸国でないため入ることはなく、一方で、アラビア半島の広大な内陸部や紅海沿岸のヒジャーズ地方を有するサウディアラビアや、固有の言語文化を有するズファール地方⁴を有するオマーンは含まれることになる。元来、ペルシア／アラビア湾沿岸といった場合、造船業や真珠採取を生活文化の基礎としていた湾岸沿いの4カ国（クウェート、バハレーン、カタル、アラブ首長国連邦）にあたる地域を意味し、サウディアラビアやオマーンは別物であった。言語についても、その両国に「湾岸方言」という意識はなく、地方名や部族名を冠した方言名が一般的であった。しかし、GCC諸国の成立により、地域言語としての湾岸方言（al-lahja al-khalijiyya）が形成され、それに基づく域内アイデンティティーも形成され共有されるようになったのである。サウディアラビア国内では、今もなおヒジャーズ、ナジュラーン、ハーイル、カスィーム、カティーフといった地方名や、タミーム、シャンマル、ハルブといった部族名を冠した方言が名称としても使われている。それと同時に現代では、自分が湾岸方言の話者であるとの意識がサウディアラビア人の間においても急速に普及しつつある現象は注目に値する。

III. 国民アイデンティティーの形成と社会変容

現在の湾岸地域を観察した場合、こうしたハリージーという新たな帰属意識の形成と、もう一方にはナショナルな国民意識の醸成という流れがある。この国民アイデンティティーは、湾岸諸国が70年代までに相次いで独立し（1932年：サウディアラビア、1951年：オマーン、1961年：クウェート、1971年：カタル、アラブ首長国連邦、バハレーン）、各国の政治・文化的政策と急速な経済発展による社会変容の中で形成されてきたものである。これらの国々は、広域なアラブ世界から言えば僻地かつ遊牧文化という、い

⁴ オマーン南西部。同地方では、セム諸語でもアラビア語とは別系統（南アラビア諸語）のシャハリ語（ジッバーリー語とも呼ばれる）やマフリー語を母語とする部族も多い〔竹田2018: 229-230〕。

わばカイロやダマスカス、チュニスやカサブランカなど都会的な歴史・文化資産を有する大都市から見れば、全く異質な要素から成る田舎的な地域と位置づけられていた。しかし、石油や天然ガスが見つかり、その豊富な地下資源の恩恵によって同地域は大量の外国人労働者を受け入れ、インフラ整備や都市化、教育の近代化が一気に進んだ。その結果、特に1980年代以降、湾岸諸国は飛躍的な経済成長を遂げ、瞬く間に近代国家としての地位を確立した。しかし、こうした発展は、人々の生活様式にそれまで経験したことがないような急速な変化をもたらし、言語使用についてもその様相は一変した⁵。国内における非アラビア語話者の増加により町中には外国語が溢れるようになり、自国の言葉や伝統文化の保護が新たな喫緊の課題として注目されるようになった。

一方で、国民国家を形成しながらも、湾岸諸国としての発展と地域統合への流れは、同地域の人々の移動を自由にした。今やクウェートからオマーンの首都マスカトまで、幹線道路で行き来することもさして難しいことではない。また、同じ部族出身である親戚が、異なる湾岸諸国に居住し、互いに異なる国籍を有していることも同地域では決して珍しいことではなく、その国家間の往来は湾岸の人々にとっては日常的である。しかし、このような部族への強固な帰属意識は、時として国民国家と国民アイデンティティの形成には遠心的に作用することもある。

湾岸諸国の独立と経済発展による社会生活の急激な変化が、域内のアラビア語を均一化の方向へ向かわせるのか、あるいは、ナショナルな文化的要素が強調されることで各国間の差異が際立っていくのかという問いは、本地域を読み解くうえで重要な視座となるだろう。そして、この問題こそ、湾岸の人々にとっての「ワタン」と言語の問題にも深く関係してくるのである。

湾岸諸国の為政者たちは、国内におけるローカル自国民の少なさや、君主制によって国民の政治参加が制限されているという事実から、同地域では政治による国民国家とその国民アイデンティティの形成が難しいということを知っている。湾岸諸国では、政

⁵ 例えば、カタールでは「ムディール」という語彙・表現に、かつての名残が見て取れる。カタールでは、ローカル自国民のカタール人が、南アジア出身の出稼ぎ労働者や給仕に「ヤームディール、タアーラ、ビスラア」（おい、そこのムディール、早くこっちへ来い）と高圧的に言っている場面に出くわすことがよくある。この語彙はアラビア語で元来「経営者」「社長」を意味し、他のアラブ諸国ではその意味で用いられている。しかし、なぜカタールでは南アジア系労働者に向かって使うのかといえば、それはかつてはインド系の人々がカタールにおいて知識人であり、また技術者であり、敬意を受ける存在であったからである。そのため、社会的ステータスがローカル自国民との間で反転した現在に至っても、カタール人は南アジア系の労働者には「ムディール」と呼びかけているのである。

治に民意が直接反映されることはほぼ皆無であるため、その国の人々にとっては「自分たちが自分たちの国をつくっている」という民主主義的な国民意識は当然のことながら希薄なままであった⁶。一方で、政治的統合原理の脆弱さは常に為政者の懸念材料であり続けた。それは、部族的紐帯にもとづく大衆活動が国家の領域を容易に越境し、また時にはイスラーム的理念が国家原則よりも優先され世論形成に至ることも同地域では往々にして起こり得るからであった。それゆえ、国家運営の安定のためにも、自国の人々を「国民」たらしめる要素を、「伝統の創造」のごとく新たに作っていく政策が必要になったのである。

このような背景もあり、湾岸諸国では政治的戦略の一つとして、特に文化的要素による国民統合の試みが近年、強く推進されるようになっていく。国を挙げたフォークロア研究の推進、国民統合を象徴するような伝統を扱った書籍の出版などは、その一例である。アブダビ、マスカト、バハレーンなどのブックフェアに行けば、どこでも、真珠採取や、昔日の日々を映した写真集、また固有の文化遺産を特集した豪華な装丁の書籍に出会う。例えば、オマーンであればルバーン（乳香）、バハレーンであればディルムン文明⁷、また各国の大衆歌謡や伝統的な遊びなどが対象となり、こうしたテーマを取り上げた子供向けの本も多く出版されている。このように、湾岸地域に共通する文化事象と並行しつつも、さらにナショナルな要素として他の国と差別化できるような民俗学的な文化、各国の方言や伝統的な生活語彙、ローカルななぞなぞなどの言葉遊びといったテーマの研究や出版が、近年、湾岸諸国では非常に盛んになっている。その一つとして、本論では湾岸諸国における方言詩の普及を取り上げる。具体的な考察に入る前に、同地域を対象とした方言研究の動向と、アラビア半島における方言に対する規範意識について簡単にまとめておこう。

IV. 湾岸諸国における言語規範

⁶ その権力支配が独裁的であるとの反発となって他のアラブ諸国のように政治運動へと発展しないのは、ひとえにレンティア国家ゆえの自国民への徹底した優遇政策と手厚い社会保障を背景にしているからであろう。

⁷ 紀元前 3000 年頃に現在のバハレーンに相当する地域を中心に、アラビア半島東部の湾岸地域で栄えた古代文明。メソポタミアやインダス文明圏との交易の要衝の一つであった。当時の栄華を残す砦の跡や古墳群は「バハレーンの要塞—古代文明ディルムンの首都と港」（英名：Qal'at al-Bahrain – Ancient Harbour and Capital of Dilmun）という名称で世界遺産に登録されている。Qal'at とはアラビア語で「砦」「要塞」を意味する。

均一性を志向する「国語」や「標準語」は、時に政治的な国民統合のために有効に機能したり、国家や民族のアイデンティティ形成に重要な役割を担ってきた。アラブ諸国では、20 世紀に独立を達成し国民国家が成立していく過程で、「標準語」としての現代アラビア語が成立した。この現代アラビア語は、識字率の向上とメディアの急速な発展により、単なる「書き言葉」「文語」の領域に留まることなく、「教養語」としてのその使用領域は今もなお拡張し続けている。一方で、アラブ諸国の言語使用状況を分析するには、書き言葉としての文語／正則語（高変種）と日常語としての口語／方言（低変種）が社会的棲み分けの意識に基づき機能しているという、いわゆるダイグロシア（二変種併用）（1959 年にファーガソンが「ダイグロシア」と題する論文を発表）の理論が広く用いられてきた。

しかし、湾岸諸国における言語社会や、アラビア語と国民アイデンティティの関係論じようとするとき、言語変種も含めたアラビア語への帰属意識や規範意識が重層的であるため――すなわち、アラビア半島に由来する部族方言、国民国家を政治的分類とした各国方言、湾岸地域の勃興により生まれた湾岸アラビア語方言、アラブ諸国の共通語としてのアラビア語、さらにイスラームの言語としてのアラビア語などが想起される――単純に正則語対方言、文語対口語というような二項対立的な分析（いわゆるフスハーとアーンミーヤ）の枠組みではその構造を正確に読み解くことはできない。つまり、同地域では先に述べたように、現代方言にもアラビア半島の古典期に由来する正則性やアラブ・セントリックな規範性、そして部族意識が密接に関係してくるため、単純にそれを正則語に対する低変種と位置づけることはできないのである。ここに、湾岸方言を論じる際のダイグロシアの枠組みの限界と新たな言語社会的分析の必要性が浮かび上がってくる。しかし、同地域を対象とした言語研究は、特に方言研究において、エジプトやシリア、マグリブ諸国を対象としたその蓄積と比較すると圧倒的に少なく、湾岸の勃興以前は長らく研究上の空白領域であったと言っても過言ではない。

V. 湾岸方言研究の動向

植民地時代にはアラビア半島のイエメンのハドラマウトやイラクについては、外部からの方言研究が進められたが、湾岸地域や半島内陸部については、ほぼ対象となることはなかった。その理由の一つとしては、調査する地域の多くが沙漠の遊牧社会であったため物理的あるいは心理的にアクセスが難しかったことが考えられる。また、石油資源

の存在が認知される前であれば、同地域が経済的・戦略的魅力に欠けていたということも、ヨーロッパの方言研究が対象としてこなかった最もたる理由であろう。そうした状況の中でも、旅行家探検家で 19 世紀にヒジャーズ地方を訪問し、マッカ方言の諺や言葉遊びを記録したオランダのスノーカルゴニーヤ [Snouck Hurgronje 1886] や、ズファール地方（オマーン南西部）の言語を記述したロドカナキス [Rhodokanakis 1911] などは希少な存在である。また 20 世紀中葉には、油田の発見から石油資源への注目が世界的に高まったことなどもあり、クウェート方言やバハレーン方言、そしてサウディアラビア方言の教本 [Kuwait Oil Company 1951] [Bahrain Petroleum Company 1960] [Arabian American Oil Company 1960] などが石油会社から英語で出版されている。

湾岸方言に関するアラビア語で書かれた先行研究については非常に限定的ではあるが、1970 年代あたりから、ロンドン大学などで言語学を修めたエジプト人研究者を中心に徐々に進められ始めた。先駆的な業績としては、マタルによるクウェート方言とカタール方言に関する記述研究 [Maṭar 1969; 1970; 1976] を挙げることができよう。また、マタルのようなヨーロッパで学んだアラブ人言語研究者によって、方言研究では基礎文献となるチャイム・ラビンによる『アラビア語古典方言（西部方言）』[Rabin 1986] や、ジョンストンの『アラビア半島東部方言研究』[Johnstone 1983] などが近年アラビア語に訳されている⁸。

次に、湾岸諸国におけるアラビア語研究の動向を瞥見しておこう。先述のマタルなどは、「方言研究は第一にフスハーの研究のためであり、方言とフスハーの密接な繋がりやそのルーツを深く考察するためである」[Maṭar 1976: 5] と述べており、方言・口語研究がフスハーの規範意識への妨げとならぬよう配慮していたことが伺える。それは、かつて西欧列強による植民地政策の一環に口語研究とフスハー廃止論があったことや、エジプトを中心に 20 世紀初頭から中葉にかけて口語推進運動やラテン文字化が提唱され、フスハー（正則語）擁護派との間で論争が激化したという歴史にも関係している。

しかし、近年の湾岸諸国に関する口語研究は、自国出身の方言研究者の台頭により、従来の傾向との間に明らかな変化が観察される。特に注目すべき成果としては、サウディアラビア人ウブーディーによる 13 巻に及ぶ大著『サウディアラビア口語語源辞典』

⁸ ジョンストンの『アラビア半島東部方言研究』を訳したサウディアラビア出身のアフマド・ムハンマド・ドゥバイブは、1960 年にカイロ大学文学部を卒業後、イギリスに渡りリーズ大学にてセム語学の博士号を 1966 年に取得。1990 年～1996 年までキングサウド大学の学長を務めた人物である。

[al-'Ubūdi 2009] と、クウェート人研究者ハーリド・ラシードによる『クウェート方言辞典』[al-Rashid 2010] を挙げることができよう。双方の研究に共通しているのは、口語や方言として使用している日常語や伝統的な生活語彙について、その正則語としてのルーツを古典辞書や古詩を典拠として実証しようとする手法である。これは、自分たちの方言がサウディアラビアにせよクウェートにせよ、ナショナルな言語であるという認識に立脚しながらも、古典やアラビア半島の諸部族の言葉使いを参照点として、その現代用法の正統性や純粋性を主張する論じ方である。言い換えれば、方言ナショナリズムとフォークロア研究の接点に、アラビア半島独自の原風景としての古典的「アラブ性」を加えた言語意識とすることができる。この意識はアラブ諸国の中でも湾岸地域に際立っているもので、同地域の各国政府が自国の方言研究を推進するという近年のトレンドにも大きく反映されている。実際に、先に挙げたサウディアラビアとクウェートの方言辞書は、研究成果を即座に社会還元できるだけの政府からの潤沢な財政支援や国家的な出版事業によって可能となったものである。

こうした点を考えると、アラビア半島や湾岸諸国における方言研究が、正則語との対立関係としては位置づけられないことが明らかになってくる。同地域における方言に対する意識は、先述のように西欧列強による植民地政策や独立後の国民国家形成において口語（アーンミーヤ）を国語にするか否かを巡り大論争を展開したエジプトや、外部からの口語推進の働きかけなどを自分たちの言語社会や言語アイデンティティー、ひいてはイスラームへの攻撃であるとみなす傾向の強いアルジェリアやマグリブのフスハー保守派とは、だいぶ異なった言語意識と言える。

例えば、湾岸諸国で日常使われる「イー、ワッラー」（はい、そうですね）という口語表現をクルアーンの文言（言いなさい〔イー、ワラッビー〕「そうです。わが主に誓ってそれは真実です」と。）[Q.10: 53]⁹に見出したり、また نَجَاج 「ダジャージュ」（鶏）を「ダヤーユ」、جَدِيد 「ジャディード」（新しい）を「ヤディード」と発音するジーム (j) のヤー (y) への転化現象¹⁰を古詩や古典期の諸部族の言語使用に見出したりすることは¹¹、

⁹ 原文：قُلْ إِي وَرَبِّي إِنَّهُ لَحَقٌّ qul ī wa rabbī inna-hū la-ḥaqq

¹⁰ 古典期よりタミーム族の方言の特徴として知られ、別名アジュアジャ方言（العجمية）と呼ばれていたが、最近ではヤアヤア方言（اليالة）という名称も提唱されている。

¹¹ ジームのヤーへの転化に関する古典の例証としては、

إِذَا لَمْ يَكُنْ فَيَكُنْ ظِلٌّ وَلَا جَنَى فَاْبَعَثَكُمُ اللَّهُ مِنْ شَجَرَاتٍ
idhā lam yakun fi-kunna ḡillun walā janān fa-ab'ada-kunna ʿllāhu min shayarātī
[shajarātī]

もしナツメヤシの実も木陰もないのなら、神が貴女がたを木々から離れさせてくれますように

その正統性を根拠に自分たちの現代方言の様相を、原風景としてのアラブ・イスラームの純正な姿に重ねるようなものであろう。

実際、湾岸諸国の場合、口語／方言使用の流布やそれによる正則語の乱れを阻止することを政策の一つとして掲げるアラビア語アカデミーのような言語調整機関の設置には、ほとんど関心を示すことはなく、設立にも至っていない。この点も、他のアラブ諸国がアラビア語アカデミーを「国語」の整備を目的とした国家事業の一環として設置してきた経緯¹²とは異なっている。むしろ、湾岸各国では方言研究が盛んになっていく中で、ナショナルな方言や民俗的な語彙に「由緒正しい」というお墨付きを付与しながら、それらを根拠ある正則アラビア語と見なしていく傾向が近年一層強くなってきているのである。次節では、こうした傾向と規範意識を踏まえながら、湾岸諸国における方言詩の普及を見ていくことにしよう。

VI. アラビア半島と湾岸諸国における文化的要素

アラビア半島や湾岸諸国という地域名からは、一般には「沙漠」や「ラクダ」が連想されることが多いかもしれない。もちろん、同地域がルブウルハーリー沙漠やヌフード沙漠といった広大な荒野・沙漠を有しており、遊牧文化の歴史や伝統があることも事実である。そういった時空を「ワタン」と位置づける人々もいるであろう。しかし湾岸諸国の多くは、むしろ「海」や「ダウ船」「真珠」に基づく生活のほうが、その地域の実相を反映している。そのことは、保坂が指摘しているように、湾岸諸国の国章にも明確に表れている〔cf. 保坂 2015: 91-92〕。クウェートやバハレーン、アラブ首長国連邦、カタールの国章は、いずれもこうした「海」や「船」をモチーフにしている。例えばクウェートの国章は、鷹とダウ船と海をあしらったもので、アラブ首長国連邦の国章も 2008 年までは同様である（その後の改正で、中央のダウ船が国旗に変更された）。カタールの場合、1966 年の国章では、真珠貝と 2 本の剣、そしてナツメヤシの枝から成っており、1976 年の新たな国章の制定では、真珠貝がダウ船と海へと変更されたが、いずれも湾岸地域としての「海」の方が強調されている。このことは、言い換えれば、湾岸諸国の国民アイデンティティ形成のために掲げられた「伝統」や同地域の「ワタン」の表象が「海」であることを如述に示している。

が有名である。

¹² アラブ諸国におけるアラビア語アカデミーは古い順に、シリア（1919）、エジプト（1932）、イラク（1947）、ヨルダン（1976）、アルジェリア（1986）、スーダン（1993）、パレスチナ（1994）、リビア（1994）において設立された。湾岸諸国では、アラブ首長国連邦のシャルジャに「アラビア語保護協会」という名称の組織が 1999 年に立ち上げられたが、その目的は他のアラビア語アカデミーとは異なり、次世代へのアラビア語や伝統文化の啓蒙、読書の推進などである。

すなわち、アラブ・イスラームの原風景としてのアラビア半島と、湾岸諸国としての主要な文化的要素はある意味、本質的に異なっていると言うことができる。アラビア半島を舞台とするジャーヒリーヤ時代の詩文学の多くは、沙漠の情景を描写することに努めているし、またアラビア半島を本拠地とするイスラームの原型や預言者ムハンマドの生涯に関しても、「沙漠」や「ラクダ」にまつわる話が多く¹³、「海」や「船」はまったく登場しない。例えば、クルアーンには、

أَفَلَا يَنْظُرُونَ إِلَى الْإِبِلِ كَيْفَ خُلِقَتْ

a-falā yanzrūna ila l-ibili kayfa khuliqat

ラクダがいかにか創造されたかを熟考しないのか（創造主である神を信じなさい、の意味）[Q.88:17]

という一節があり、またハディースには、

رُؤُوسُهُنَّ كَأَسْنِمَةِ الْبُخْتِ الْمَائِلَةِ

ru'usu-hunna ka-asnimati l-bukhti l-mā'ila

女性はラクダのこぶのように髪を高く纏めてはいけない

のように、ラクダを比喻とした多くの伝承を見つけることができる。さらに、古典語における数百にも及ぶラクダの名称や関連語彙の豊富さなどが表しているように、アラブ・イスラームの原風景としてのアラビア半島については、沙漠や遊牧性といった要素、そしてその部族的紐帯・連帯などが前面に出てくることが多い。しかし、このアラビア半島の「沙漠」と湾岸諸国の「海」の双方の特性を結びつける文化的要素がある。それが「詩」である。

現代の湾岸諸国における詩文化の興隆には2つの流れがある。一つは、方言学や民俗学・フォークロア研究などが対象とする口語／方言詩と伝統文化の保護で、もう一つは、湾岸パワーによる詩作発信拠点の構築と湾岸地域の強化である。

VII. クウェートにおける方言詩「ナフマ」

¹³ 例えば、シーア派が伝える「ガディール・フナムの遺言」の場面では「ラクダの鞍」が登場する。またムハンマド没後の初期イスラーム時代でも「ラクダ」というキーワードで言えば、妻のアーイシャがラクダに乗って出陣し、その輿が載ったラクダの周辺でアリー派と激戦を繰り広げられたことに由来する「ラクダの戦い」(mawqī'at al-jamal, 656年バスラ郊外)などが有名である。

湾岸地域における方言詩には、他のアラビア語圏でも用いられるマウワール(mawwāl)、ムワッシャハ(muwashshaḥa)といった用語の他に、ラフジャリー(lafjarī)、フマイニー(ḥumaynī)、ナフマ(nahma)など様々な名称が存在する。その区別が曖昧なものもあるが、一般的には方言詩は広くナバティー(shi'r nabaṭī)という名で知られている。ナバティーという呼称は、かつてアラビア半島に住んでいたとされるナバテア人(qawm al-anbāt)に由来する¹⁴。このナバティー詩にリズムをつけ歌曲となったものはシーラ(shīla: 複数形はシーラート[shilāt])と呼ばれ、近年のサウディアラビア、カタルなどの若い世代を中心に現代風のシーラが広まっており、湾岸文化として流行の様相を見せている。シーラは古来より遊牧民の歌謡として知られ、もとは楽器を使わずに純粋な声のみでリズムや旋律に合わせて吟じる歌謡であった。しかし、最近では人口的な楽器の音を様々にアレンジした音楽へと変容している。シーラが扱うテーマは、君主や首長への称賛など政治的なものから、ラクダレースや鷹狩、駿馬、アラブコーヒーなど、遊牧民の生活文化やアラビア半島の原風景的なアラブ文化に関連したものが多い。

またクウェートをはじめ、バハレーンやアラブ首長国連邦などでは、産業としては衰退してしまったが、真珠採取に携わる海士や漁師による方言詩に長い伝統がある。近年は、文化ナショナリズムによる国民統合を目的とした国家戦略を背景に、同テーマに関する大々的なイベントや研究プロジェクト、関連書籍の出版などが非常に盛んに行われている。この種の方言詩はナフマと呼ばれる。ナフマは元来、ラクダ引きの歌謡を意味していた。それが、湾岸諸国を中心に造船業や真珠採取が同地域の主要産業として普及し定着していく過程で、「海」の歌謡に特化した呼称へと変わっていった。ナフマは口語詩であるマウワールの一種とされているが、より細かい分類としては、潜りの後の休憩時に吟じるヒダーディー(ḥidādi)、出帆や帆を上げる際に吟じるハトゥファ(khaṭfa)、オール漕ぎや船上全般で吟じられるヤーマール(yāmāl)などがある。そして、このナフマを吟じる詩人がナッハーム(nahhām)である。

以下は、クウェートを代表するナッハームの一人、アブドゥッラー・ファラジュ(1836-1901)による有名な詩の一節である [Kamāl 1986:197]。

¹⁴ ナバテア遺跡は現代のヨルダンにあるペトラ(ナバテア王国の首都)やサウディアラビアのマダーイン・サーリフで有名だが、ナバテア人はアラビア半島北部に起源を持つアラブ遊牧民であるとされている。さらに古くはアラビア半島南部やヒジャーズ地方、あるいは東部湾岸地域に住んでいたなど諸説ある。

ودعتمكم بالسلامة يا ضو عيني	wadda'ti-kum bi ^ˀ ssalāma yā ḍaw 'aynī
وخلافكم ما غمض جفني على عيني	wa khilāfi-kum mā ghammaḍa jifnī 'alā 'aynī
واعدتي بالوعد لمن حفت عيني	wā'adtinī bi ^ˀ l-wa'd lamman ḥaffat 'aynī
ظليت يا سيدي جسم بليا روح	ẓallīt yā sīdī jism bilayyā rūḥī
جد فرمني العقل وظل الجسم مطروح	jadd faramanī ^ˀ l-'aql wa ẓalla ^ˀ l-jism maṭrūḥī
كل العرب هودت وأنا شقي الروح	kullī ^ˀ l-'arab hawwadat wa ana shaqiyyī ^ˀ rrūḥī
يا نور عيني مثل ما أراعيك راعيني	yā nūr 'aynī mithla mā arā'ika rā'inī

愛しい人よ、あなたの旅の安全を祈願して見送りました
 しかし、あなたがいないと目を瞑って休むこともできません
 目を閉じながら、あなたは約束してくれました
 私の大切な人、私はもはや魂の抜けた身体になってしまいました
 心の寂しさから、身体を横たえたまま動くこともできません
 周りの人たちはみんな落ち着いていられるようですが、私の心が安堵することはありません
 私があなたを思っているように、どうかあなたも私のことを思っていてください

石油の恩恵によって今日目にするような近代国家へと変貌する前の湾岸地域の生活は、ひとえに天然真珠の採取に大きく依拠していた。真珠採取のための漁場への船旅は、数週間から時には数か月に及ぶこともあり、常に危険が伴った。その船旅に関わる乗組員のメンバーは、キャプテン (nawkhadha)、補佐 (muqaddimī)、海士 (潜り師) (ghawwāṣ)、綱を引く人 (sīb)、水先案内人 (sakūnī)、貝をさばく人 (jallāsh) などから構成される。そして、こうした乗組員を詩吟によって鼓舞したり士気を高めたり、また時には大漁を祈願したりする役を担ったのがナッハームであり、真珠採取の旅にはナッハームの同行が不可欠であった。現代では、このような真珠採取船の生活風景やナッハームによる詩吟の様子を記録した映像の保存・公開、さらに同テーマに関するオーラルヒストリーの収集・調査などが、湾岸各国による主導の大型プロジェクトとして進められている。

また同時に、地域全体において同質的な言語文化を共有する湾岸諸国では、先述のように各国の国民アイデンティティを確立するために、「クウェート人」や「カタル人」「エミレーツ人 (UAE 人)」といった「～人」たらしめるような国家的文化遺産や自国

の方言への帰属意識の形成が不可欠である。各政府は、そのことを認識しており自国の文化的取り組みを強調する戦略から、ナショナル色あふれる民俗博物館の設置や、国民的文化行事の開催などが湾岸各国で急速な広まりを見せている。こうした動向は、一国ナショナリズムによる作為的な「ワタン」の形成と強化に映るが、本質的には、「海」を基調とする湾岸地域という「ワタン」とその伝統文化のあり方にも関係している。

例えば、クウェートでは昔日の真珠採取を再現するイベントの日を、1987年に国民の日（8月7日）として制定し、国を挙げて文化遺産の保護に取り組む姿勢を打ち出してきた。この祝日は「ダッシャ」（dashsha）と呼ばれ、古くはクウェート方言で「船出の日」を意味する語であった [Khalaf 2008: 52]。しかし興味深い点は、クウェートの一国ナショナリズムを強調するイベントである一方、そのスローガンには「湾岸（ハリージュ）は一つ、未来も一つ」（khaliju-nā wāḥid, maṣīru-nā wāḥid）とあり、ハリージー（湾岸人）としてのアイデンティティーについても決して軽視していないことである。

このように、真珠採取やダウ船とその歌謡や詩文化は、湾岸諸国のナショナルな伝統文化の象徴と位置づけられる一方で、それと対立することのない形で、湾岸地域に共通する文化アイデンティティーやハリージー意識の形成にも重要な役割を果たしているのである。

VIII. 湾岸イニシアチブによる詩文化の普及

さて湾岸諸国では、こうしたフォークロア的な伝統遺産としての方言や詩文化の保護に加えて、湾岸地域の紐帯強化・確立のための詩文化の推進という流れがある。伝統を重んじる一方で、その豊富な国家予算と潤沢なスポンサーによって、湾岸主導型の新たな文化発信の拠点構築を目指している。これは 1990 年代以降の湾岸メディアの勃興とともに顕在化してきた潮流で、各地では文学サロンや詩の大会イベントなどが盛んに開催され、さらに湾岸地域の方言に限定した詩人オーディション番組まで放送されるようになり、急速に大衆の支持を獲得しつつある。中でも有名な番組が、ナバティー詩人のオーディション番組「ミリオン詩人オーディション」（shā'ir al-milyūn、アブダビ、2006 年 6 月～）である。ミリオンは、100 万ディルハム（＝約 3000 万円）という多額の賞金を意味している。これは 2002 年からアメリカの ABC 放送で始まった「アメリカン・アイドル」や、2004 年からイギリスの ITV が放送している「X ファクター」に倣った湾岸アラブ版のオーディション番組である。特徴は、湾岸方言によるナバティー詩に特化

したオーディションであることと、視聴者が審査員として参加できることであり、その賞金の高さも話題性を集めることに寄与した。使用言語については、ローカル色の強い地域方言や固有の語彙をなるべく避け、地域全体で理解できるリングフランカ的な共通湾岸方言 (al-lahja al-bayḍā')¹⁵を用いる出場者が多い。これも多くの人に受け入れられた要因の一つであろう。今や同番組は、湾岸地域で最も人気ある番組の一つとして、その人気の高さと知名度を誇っている [Holes 2013: 289]。

以下に一例として見るように、オーディション合格者・受賞者は、湾岸諸国 (GCC 諸国) の出身者で占められている。女流詩人も 2009 年にサウディアラビアからイーダ・ジュハニーが 4 位、2016 年にアラブ首長国連邦 (UAE) からザイナブ・バルーシーが 6 位を受賞している¹⁶。

第 6 回受賞者 (2014 年)¹⁷

1. サイフ・サーリム・マンスーリー (UAE)
2. カーミル・ナースィル・バトハリー (オマーン)
3. マストゥール・ズワイビー (サウディアラビア)
4. ムハンマド・イブン・ジュハイル (バハレーン)
5. アリー・カフターニー (UAE)
6. ハマド・サイード・バルーシー (UAE)

第 7 回受賞者 (2016 年)¹⁸

1. ラージフ・ナウワフ・フマイダーニー (クウェート)
2. サアド・バッテリー・スバイイー (クウェート)
3. ムハンマド・サクラーン・タミーミー (サウディアラビア)
4. アブドゥルマジード・ルバイウ・ズィヤービー (サウディアラビア)
5. ハッザーム・サフリー (サウディアラビア)
6. ザイナブ・バルーシー (UAE)

この湾岸方言詩に限定したオーディション番組とは対照的なのが、同じくアブダビの

¹⁵ 直訳すれば「白い方言」で「シンプルな方言」を意味している。

¹⁶ GCC 諸国以外の入賞者は、2006 年 5 位入賞のユースフ・ウサイミー・ウタイビー (イラク) と、2007 年 3 位入賞のアーミル・ブン・ウマル (イエメン) の 2 名だけである [https://www.millionspoet.ae/archive/ 2018 年 6 月 8 日閲覧]。

¹⁷ [https://www.millionspoet.ae/archives/15 2018 年 6 月 8 日閲覧]

¹⁸ [https://www.millionspoet.ae/archives/14 2018 年 6 月 8 日閲覧]

放送局によって 2007 年から開始された「詩人たちの長」(amir al-shu'arā') である。このネーミングからは、エジプトの大詩人アフマド・シャウキー (1862-1932) が想起され、その名の通り正則語であるフスハーに限定した汎アラブ的な詩人オーディション番組である。参加者や審査員にはアラブ首長国連邦だけでなく、エジプトやアルジェリアなどアラブ諸国の出身者も多く並ぶが¹⁹、目玉となる高額の賞金やこの上なく豪華な番組作り、そして高い集客力や人気からは、アラビア半島こそがアラビア語やアラブ詩の発祥の地であること、すなわちアラブ人 (アラビア語話者) にとっての原風景的な「ワタン」であることをアピールしているようにも感じられ、同時に湾岸諸国としてのアラブ首長国連邦の国威を発揚するメディア戦略としても十分に功を奏していると言えよう。古来よりアラブ人が誇った詩の文化が、こうして新たな湾岸地域の勃興によって再び注目を浴びていることは、今後のアラビア語の将来や文化発信力の国際的なパワーバランスの変化を考える上でも新たな視座を提供してくれる。

IX. 結語

本論では、近年目覚ましい経済発展を遂げている湾岸アラブ諸国を対象に、国民アイデンティティの形成を、国家とは別に存在する新たな拠り所としての湾岸 (ハリージュ) への帰属意識に注目しながら考察をしてきた。その結果、GCC 諸国の成立により 80 年代以降に地域統合が強まったことで、言語についてもアラビア半島の古典的規範に加えて、ナショナルな方言と湾岸方言という二つが文化形成の基盤として機能していることが指摘できた。さらに、同地域の言語文化に関わる伝統や国家政策をクウェートの方言詩とアラブ首長国連邦の放送メディアを事例に明らかにした。本論を「ワタン」という鍵言葉でまとめると、現代の湾岸諸国には三つの「ワタン」が見えてくる。一つは、アラブ・イスラームの原風景的な沙漠文化の「ワタン」、二つ目はダウ船や真珠採取といったキーワードを共有する湾岸地域という「ワタン」、そして三つ目は一国ナショナリズムによって強調される政治・作為的な「ワタン」である。湾岸諸国ではこの 3 つへの帰属意識が重層的に存在し、言語規範にも影響を与えながら、それぞれの「ワタン」を希求した言語文化を今も発展させ続けている。

¹⁹ [<http://www.princeofpoets.com/ar/viewmultimedia.php?cat=4> 2018 年 8 月 23 日閲覧]

参照文献

- Arabian American Oil Company. 1960. *Basic Arabic*. Dhahran: The Company(ARAMCO).
- Bahrain Petroleum Company. 1960. *Handbook of the Spoken Arabic of Bahrain*. England: Stephen Austin and Sons.
- 保坂修司 2015「湾岸諸国の国民国家体制の行方」『グローバル戦略課題としての中東—2030 年の見通しと対応—』平成 26 年度外務省外交・安全保障調査研究事業（総合事業）、日本国際問題研究所, pp.87-101.
- Holes, Clive. 2013. “Orality, Culture, and Language,” *The Oxford Handbook of Arabic Linguistics*. ed. by Jonathan Owens. New York: Oxford University Press.
- 堀抜功二 2011「イマラーティーはどこに：UAE におけるナショナル・アイデンティティとは」『アラブ首長国連邦（UAE）を知るための 60 章』明石書店.
- Johnstone, T. M. 1983. *Dirāsāt fi Lahjāt Sharqī al-Jazīra al-‘Arabiyya*. tr. by Aḥmad Muḥammad al-Ḍubayb. Bayrūt: al-Dār al-‘Arabiyya li-l-Mawsū‘āt.
- Kamāl, Ṣafwat. 1986. *Madkhal li-Dirāsāt al-Fūklūr al-Kuwaytī*. al-Kuwayt: Sharikat Dhāt al-Salāsīl.
- Khalaf, Sulayman. 2008. “The Nationalisation of Culture: Kuwait’s Invention of a Pearl-Diving Heritage,” *Popular Culture and Political Identity in the Arab Gulf States*. London: Saqi.
- Kuwait Oil Company. 1951. *Handbook of Kuwaiti Arabic*. Kuwait: Kuwait Oil Company.
- Maṭar, ‘Abd al-‘Azīz. 1969. *Khaṣā’iṣ al-Lahja al-Kuwaytiyya*. Dirāsa Lughawiyya Maydāniyya. al-Kuwayt: Maṭābi‘ al-Risāla.
- _____. 1970. *Min Asrār al-Lahja al-Kuwaytiyya*. Dirāsa Lughawiyya Maydāniyya. al-Kuwayt: Jāmi‘at al-Kuwayt.
- _____. 1976. *Ẓawāhir Nādīra fi Lahjāt al-Khalīj*. al-Dawḥa: Mu‘assasat Dār al-‘Ulūm.
- 松尾昌樹 2010『湾岸産油国：レントィア国家のゆくえ』（講談社選書メチエ；477）。講談社.
- Rabin, Chaim. 1986. *al-Lahajāt al-‘Arabiyya al-Gharbiyya al-Qadīma*. tr. by Abd al-Raḥmān Ayyūb. al-Kuwayt: Jāmi‘at al-Kuwayt.
- al-Rashīd, Khālīd ‘Abd al-Qādir ‘Abd al-‘Azīz. 2010. *Mawsū‘at al-Lahja al-Kuwaytiyya*. 2nd. ed., al-Kuwayt: Khālīd ‘Abd al-Qādir ‘Abd al-‘Azīz al-Rashīd.
- Rhodokanakis, Nikolaus. 1911. *Der vulgärarabische Dialekt im Dofār (Zfār)*. Wien: A. Hölder.
- Snouck Hurgronje, Christiaan. 1886. *Mekkanische Sprichwörter und Redensarten*. Haag: M. Nijhoff.
- 竹田敏之 2014「現代モリタニアにおけるアラブ・イスラーム文化の諸相」『イスラーム世界研究』京都大学イスラーム地域研究センター, vol.7. pp.276-297.
- _____. 2018「オマーンにおけるアラビア語—多言語社会とバラエティ豊かな方言の魅力」松尾昌樹編『オマーンを知るための 55 章』明石書店.
- al-‘Ubūdī, Muḥammad ibn Nāsir. 2009. *Mu‘jam al-Uṣūl al-Faṣīḥa li-l-Alfāz al-Dārīja aw Mā Fa‘alat-hu al-Qurūn bi-al-‘Arabiyya fi Mahd-hā*. 13 vols. al-Riyād: Maktabat al-Malik ‘Abd al-‘Azīz al-‘Āmma.